

【現代語訳】

中将（Ⅱ重衡）はたいそう喜んで、「大納言佐殿（Ⅱ北の方）は、ここにいらっしやいますでしょうか。本三位中将殿が、ただいま奈良へお通りになります。『立つたままお目にかかりたい』とおっしゃっています」と、人を入れて言わせたところ、奥方は（それを）聞くやいなや、「どこにいるの、どこ」と言つて、（部屋の奥から）走り出て見なされたところ、藍で模様を摺り出した直垂に、上部を折り畳んだ烏帽子をかぶっている男で、痩せて黒くなっている男で、家の外側の板敷き部分に寄つて座っている男が、そう（Ⅱ重衡）であつた。奥方が、御簾の際近くに寄つて、「どういふことか、夢か現実か。こちらへ入りなさいませ」とおっしゃつた（奥方の）お声を（重衡が）聞きなされると、早くも先立つものは涙である。大納言佐殿が、目もくらみ動揺して、しばらく、ものもおっしゃらない。

三位中将が御簾を被りながら、泣く泣くおっしゃつたことには、「去年の春、一の谷で死んでもおかしくなかつた私が、あまりにひどい罪の報いなのだろうか、生きたまふ捕らわれて大路を渡されて、京・鎌倉で、恥をさらすのさえ残念なのに、最後は奈良の大勢の僧侶の手に渡されて斬られることになつて、連れてこられました。『なんとかしてもう一度、お姿を拝見したい』と思つていたが、今はもう少しも思い残すことはない。『出家して、形見に髪をも差し上げたい』と思うが、許されないので、どうしようもない』と言つて、額の髪を少し分けて口が届くところを食い切つて、『これを形見に御覧なさい』と言つて、差し上げなされる。奥方は、数日間夫の安否を気がかりに思つていらつしやつた時よりも、今いっそう悲しみの色が増しなされる。